

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	光 戸 利 奈
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
アルツハイマー型認知症患者における物語課題の再生特徴			
論文審査担当者			
主 査	教 授	宮 谷 真 人	
審査委員	教 授	中 條 和 光	
審査委員	教 授	湯 澤 正 通	
審査委員	准教授	中 尾 敬	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、アルツハイマー型認知症（dementia of Alzheimer's type, 以下 AD）の早期発見のための検査法として、日本版リバーミード行動記憶検査（Rivermead Behavioural Memory Test, 以下 RBMT）の下位検査の一つである「物語課題」に着目し、その有用性を検討したものである。論文は、以下の4章で構成される。</p> <p>第1章で、著者は、わが国においてAD患者が急増している状況を踏まえ、ADの早期発見、早期介入の重要性を強調する。また、ADの診断に現在よく使用されているMMSEなどのスクリーニング検査には、検出力、実施に要する時間、実施の繰り返しによる学習効果などの観点から問題が多いことを指摘し、患者にとって負担が少なく、ADと非認知症（Non-Dementia, 以下 ND）の判別力が高い検査法の開発が必要であると指摘している。</p> <p>著者は、これまでの研究報告を精査し、AD患者は見当識、記憶、言語、視空間認知・構成の4つの認知機能のうち、特に記憶に関してNDと大きな成績差を示すこと、当初は頭部外傷患者や脳血管障害患者へ適用されていたRBMTが、ADやその前段階であるとされる軽度認知障害（Mild Cognitive Impairment, 以下 MCI）の検出に優れることから、その下位検査の一つである物語課題がADとNDの判別に特に有効であるとの仮説を立てた。さらに、神経心理学的検査の結果を解釈する際には、最終的な回答に至るまでの過程に焦点をあてた分析が有効であり、物語課題に関しても、特定の物語を聞かせた後に正しく再生された言葉の数だけでなく、再生された物語内容の特徴を把握することが重要であると主張する。以上のことから、本研究の目的として、RBMTの物語課題の成績がADとNDの判別に有効かどうかを検討すること、両者の判別に寄与するADの物語再生の特徴を特定することの2つを挙げている。</p> <p>第2章では、物語課題の成績がADとNDの判別に有効かどうかを検討した2つの研究が報告されている。研究1-1では、AD患者26名、MCI患者16名、ND者16名を対象として、RBMTを施行した。検査で得られる14項目（姓、名、持ち物、約束、絵、物語直後再生、物語遅延再生、顔写真、道順直後再生、道順遅延再生、用件直後再生、用件遅</p>			

延再生, 見当識, 日付) の素点を説明変数として判別分析を行い, 下位検査のどれが AD, MCI, ND の判別に影響を与えるのかを検討した。その結果, 物語遅延再生が ND 群, MCI 群のどちらの判別にも関連していることが示されたが, AD 群の判別に影響を与えた項目は明らかにならなかった。

研究 1-2 では, MMSE が 24 点以上の初期 AD 患者 52 名と ND 者 26 名を対象として, 研究 1-1 において有意な判別力を示した「絵」「物語直後再生」「物語遅延再生」「道順直後再生」「道順遅延再生」「日付」の 6 つの下位検査の中で特にどれが初期 AD を検出する上で有用かを検討した。その結果, 物語遅延再生が判別に最も有効であることが明らかになった。さらに, 物語遅延再生を除く 5 つの下位検査を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った結果, 「絵」と「物語直後再生」が判別に有効であることが示された。

第 3 章では, 第 2 章で AD と ND の判別に有効であることが示された「物語遅延再生」「物語直後再生」「絵」のうち, 特別な検査用具を必要とせず短時間で実施できる「物語直後再生」を取り上げ, 初期 AD の物語再生内容の特徴について 3 つの研究で検討している。初期 AD 群 63 名と ND 群 7 名に物語直後再生課題を実施し, Mandler & Johnson (1977) による物語文法の視点から分析した結果, 初期 AD 群では「どこで」「誰が」「何をした」といった必須補語や「結果どうなった」という結末の理解が低下していること, 特に「最終的にどうなったか」という物事の結末が再生できないこと, これらの項目の再生の有無により, AD と ND の判別が可能であることが示された。

第 4 章では, 著者は, 本研究の成果と意義として, RBMT の物語課題を初期 AD のスクリーニング検査の一つとして活用できることを実証したこと, 今後, 検査によって生じる抵抗感や嫌悪感を与えないような日常会話といったコミュニケーションの中から認知機能の低下を明らかにできる方法の開発の可能性を示したことを挙げている。さらに, それを実現するために解決しなければならない課題として, 本研究で得られた結果の外的妥当性について検証すること, および初期 AD において必須補語や結末部の成績がなぜ低下するのかを理解するために, ワーキングメモリをはじめ, 物語の理解や再生への関与が想定される認知機能と物語課題の成績との関連性を理論的に検討する必要性を指摘している。

本論文は, 次の 2 点で高く評価できる。

1. AD の根本的な治療法がまだ見つかっていない現状で, 既存の神経心理学的検査の一部を工夫して活用して簡便かつ検出力に優れたスクリーニングを実施する方法を提案したことは, AD 初期段階での投薬や認知訓練の実施によって進行を止める可能性を広げるものであり, 社会への貢献が極めて大きい。
2. 物語の再生特徴に注目することが AD と ND の判別に有効であることを示したことは, 今後, 日常的な会話をスクリーニングに利用できる可能性を示したこと, および AD の認知心理学的理解を進めるための研究の方向性を示した点で, 理論的意義がある。

以上, 審査の結果, 本論文の著者は博士 (心理学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 2 年 2 月 14 日